

インド航路の開拓で 繁栄したポルトガル



香料など、
東方物産の直接入手を狙った
ポルトガルのインド航路開拓は、
東方貿易を一変させた。

「航海王子」から一世紀続いた 直航ルートの開拓

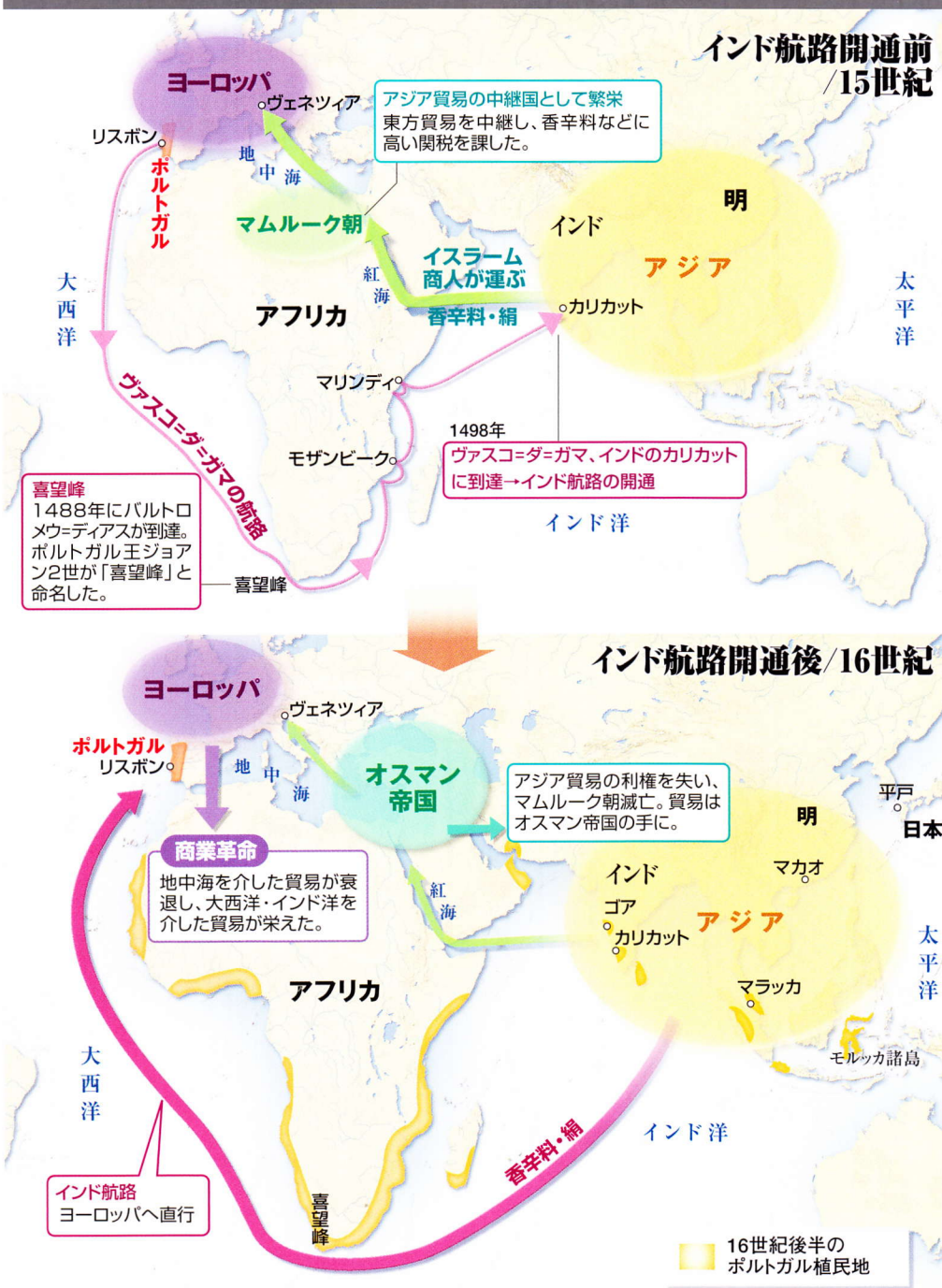
15世紀のイベリア半島では、レコンキスタの進展とともに、ポルトガル、カステイリヤ、アラゴンの3王国が勢力を増していた。これらの国はさらなる領土の獲得や、ヨーロッパ人の生活に欠かせなくなっていた胡椒などの香料を直接入手するため、海外へと進出していった。

ポルトガルでは15世紀初頭、エンリケ航海王子が王室の事業としてアフリカ北西部の海岸などの探検を開始。彼はそのほかにも航海士の養成所をつくって航海技術の向上を図るなど、その後のポルトガル航海事業の礎を築いた。

エンリケの死後もアフリカ西岸探検は続けられ、1488年にはバルトロメウ・ディアスがアフリカ南端の喜望峰に、さらに98年には、ヴァスコ・ダ・ガマが喜望峰をまわり、インド西岸のカリカットに到達した。その後、1510年にインド西岸のゴアを占領したポルトガルはこの地に総督府を置き、翌11年にはマレー半島南部のマラッカを占領。さらに香料の産地であり、「香料諸島」ともよばれたモルッカ諸島に到達して、イスラム商人などに支配されていた香料交易の一角に加わった。

マラッカ占領後のポルトガルは、明との交易を開始し、1557年にはマカオに居住権を獲得。その前の43年には日本に到達して、平戸を根拠地とした対日交易を開始した。こうしてポルトガルは東アジアからヨーロッパにいたる直航ルートをつくりだし、16世紀前半、首都のリスボンでは香料をはじめとする東方物産の荷揚げ港として繁栄した。

インド航路の開通と通商の変化



Key
Word

香辛料

肉の保存や味付けには欠かせない香辛料だが、ヨーロッパでは古くからその薬効も知られていた。長らく香辛料貿易を独占していたのは、主産地のインドや東南アジアとヨーロッパの中間に位置するイスラームの商人だった。片道2年もかかったという香辛料貿易の結果、ヨーロッパに着くころには同じ重さの銀と取引されるほど高価になっていた。